

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第 15 号



2014年6月15日発行

発行責任者 岡田守弘

芳川玲子

〒259-1292

平塚市北金目 4-1-1

東海大学文学部心理・社会学科

巻頭言

今一度、学校心理士の自らを振り返る

神奈川支部会員の皆様、新年度にあたり職場やお立場が変わられた方々もおありと思います。もう新しい環境には慣れましたか？

さて、心理師の国資格化の問題から目が離せない昨今ですが、このことを突き詰めて考えると、改めて「学校心理学とはどういう分野だったのか？」と自問するようになりました。

私も大学で学生に「教育相談」「学校カウンセリング」といった授業を担当していますが、ここでよく話すのは、臨床心理学と学校心理学の違いです。前者は「臨床的介入」つまり、不適応を起こしている対象に対してカウンセリングやアセスメントを行うイメージ。それに対して学校心理学は、学校というフィールドに絞って児童生徒の心のケアを行う分野。

そう考えて見ると、学校心理学のアプローチは、必ずしも直接的な相談業務や治療的な関わりに限りません。周囲(親や友達)に働きかけ、結果的に子ども自身が生きやすい環境を整える「コンサルテーション」。よりよい人間関係を構築して不適応そのものを起こしにくい教室環境(学校風土)を作るなど、学校の特質を知らないといけない守備範囲と言えます。実際に子どもたちが様々な心のケアを必要とするような不適応が生じるのは、多くの時間を過ごす学校であることが多いと思われます。ですから、教師自身や、スクールカウンセラー等の学校教育関係者は、学校心理学の知見を持つべきであると考え、教職をめざす学生にもそう話しています。

ところで3.11の時も、スクールカウンセラーの配置事業を始めた時も、どうも国が考えている心理師というイメージは、直接的な臨床的介入への期待に偏っているように思います。しかし、本当に学校現場に必要なものは何でしょうか。心理師の国資格化の経過を見ていると、こと子どもたちに対するには、学校心理学にもっと目を向けて良いように思えてなりません。あわせて我々学校心理士としても、臨床心理士等の職分に踏み込むのではなく、学校関係者ならではの専門領域を確立することが必要なのではないのでしょうか。筑波大学の石隈先生は、その著作の中で3段階の援助サービスと4種類のヘルパーという説明をされています。心理的援助を職務として行う専門職としての心理職、本来業務ではないけれど、仕事の上で結果的に心理的援助をすることになる教師などが学校における子どもたちへの援助者(ヘルパー)ですが、両者の中間(あるいは両方)に位置づき、双方の専門性を繋ぐ役割を担うのが学校心理学の知見を持った皆さんなのではないのでしょうか。今一度教師として、学校心理士としてできること、自分自身の専門性を一緒に考えてみませんか？

神奈川支部副支部長 田村順一

第34回研修会報告

日時 2013年10月27日(日)

場所 かながわ労働プラザ

「WISC検査の読みとり方 —教育へのつなげ方—」

講師 神奈川県教育スクールカウンセラー配置事業 スーパーバイザー
大草 正信 先生

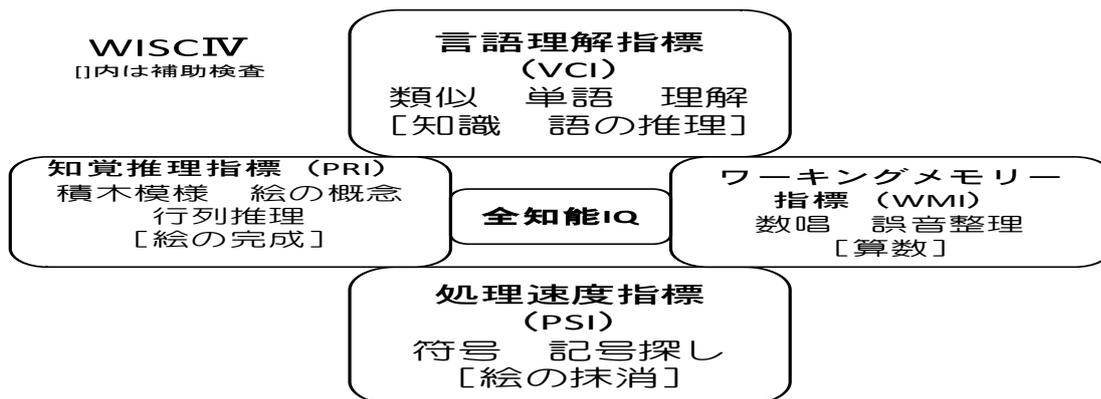
◆教育現場と知能検査

教育の現場において知能検査が有用につかえていないのは、知能や知能検査に関する知識の無さに起因している。特に障害児教育においては根拠に基づく指導が大事だが、その根拠を知る道具が知能検査だ。しかし、知能検査を活用するためには知能指数や下位検査の意味をよく理解しないとできない。指数は、その指数がどんな下位検査の得点で成り立っているか分からないと意味がない。

◆WISCⅢからWISCⅣへ

Ⅳは先に理論があり、伝統的統計手法から構成されたⅢとは基本コンセプトが違う。臨床家としてはⅢの方が使いやすい。

実像を把握するのに有用な、Ⅲにはあった下位検査がⅣでは省かれている。



◆障害理解～医学モデルと教育モデル

AD(自閉系)系障害

左脳にも右脳にも能力の自閉特有の凸凹があるが、総じて左脳有利な在り方。
特異意味づけ 特異思考 好ましがわからない 目的がわからず手段に拘る

MR(遅滞)系障害

左脳にも右脳にも能力の遅滞特有の凸凹があるが、総じて右脳有利な在り方。
不器用な思い方 迂遠思考 不器用な運動・操作 手順や順序が漫然となる

◆知能検査と学校心理士

知能検査の結果は知能そのものではない。検査の結果から知能の実態を論理的に推定しなくてはならず、そのために必要な推論エンジンが心理学的な知識である。知能を情報処理過程と捉え「～ができない」と分析するよりも「どのように解くのか」の知見の方が指導やセラピーに役立つ。学校心理士は、プロフィールやデータが読め所見を教育的に活用できることが期待される。検査は子どものために行うものであり、「何を知りたいのか」を持っていないといけない。

「特別な教育的支援を必要とする児童生徒への支援と対応」

ー心理学の視点から見てみるとー

講師 国立特別支援教育総合研究所 教育情報部長/発達障害教育情報センター長
柘植雅義 先生

◆研修の概要

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への支援と対応に関わる4つのトピックについて心理学の視点より考える。

(1) 教室の中の多様性とその把握

文科省による2012年の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、学習面又は行動面での著しい困難を示す児童生徒の割合は6.5%であった。2003年の調査結果(6.3%)と併せて、このくらいは存在するという認識が新たになった。しかし、その得点分布は連続的に変化しているため、どこで切るかに影響される。そう考えると、もっと多いはずだという教員の声にも頷ける。

学年毎の結果では小1が最も高く、その後、減少する傾向がみられた。これは学習面で顕著であり、調査項目が小学3・4年までに顕在化する困難を強く意識して作成されたことによるのであり、学年が上がるごとに学習への困難が減じるわけではない。つまり、どのように把握するのかを考える必要がある。

(2) その指導、援助に効果はあるのか

医療分野などに比べると遅れてはいるが、エビデンスに基づく実践が求められている。つまり、どうすることで、何が、どうなったかという、介入の検証が求められている。アメリカでは、事例研究を多数集めて検討する系統的レビューによって、効果の程度による指導方法の格付けも行われている。

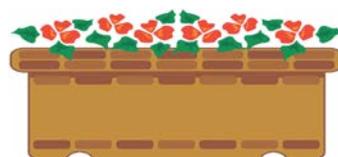
(3) 特別支援教育におけるコンサルテーション

特別支援教育の時代になって、コンサルテーションの需要が高まっている。発達障害を対象とする通級学級において、特に、通級の担当者による、通常学級の担任や保護者へのコンサルテーションが必要になっている。特別支援教育学校のセンター的機能や大学関係者等からのコンサルテーションも行われているが、これらの知見を整理する研究が少なく、必要性を感じている。

(4) インクルーシブ教育システム構築における心理学の役割

障害のある子どもとない子どもが共に学ぶインクルーシブ教育を推進する際、障害のある子どもが授業の内容を分かり、学習活動に参加している実感・達成感を持ち、充実した時間を過ごし、生きる力を身につけているかの把握、同様に、障害のない子どもについても、インクルーシブ教育の効果の把握を考えて行かなくてはならない。

このように、全般を通して、効果検証によるエビデンスの重要性を訴える内容であった。



2014年度の主な予定

- 2014年度神奈川支部第16回総会・第36回研修会
6月15日(日) 神奈川県立かながわ労働プラザ
第16回総会 14:00~14:30(受付13:30~)
第36回研修会(2014年度夏季南関東ブロック研修会) 14:30~16:45
「いじめを含む学校危機対応における学校心理士の役割」 瀧野 揚三先生(大阪教育大学)
- 第37回研修会
10月19日(日) ウィリング横浜 講師:新倉アキ子先生(帝京大学)
- 第38回研修会(2014年度冬季南関東ブロック研修会) *県北地区会主催
2015年2月22日(日) 場所未定
研修会テーマ「(仮)教職員のメンタルヘルス」 講師:真金 薫子医師(三楽病院)

本の紹介



「いじめを考える」 nada いなだ 岩波ジュニア新書 1996年刊
「いじめで子どもが壊れる前に」 藤川 大祐 角川学芸出版(新書) 2012年刊

現在、学校現場が取り組むべき課題のひとつ、「いじめ」についての本です。なだは精神科医で、根源的なテーマを対話形式で書籍にする手法をよく使っています。藤川はネット社会との関連やこれまでのいじめ事件も揭示しています。どちらも読み易い本ですが、16年の間を置いて発行されているのに、共に「深刻化するいじめ」と帯にある所が興味深いです。

お知らせ

日本学校心理士会 2014年度大会

- 期日:2014年8月30日(土)・31日(日)
- 会場:文教大学 越谷キャンパス(埼玉県越谷市南荻島3337)
- 大会テーマ:一人間愛・力を合わせて子どもの支援—
- 基調講演:「学校心理学の新しいモデル—学習援助からいじめへの対応まで」
日本学校心理士会会長・筑波大学副学長 石隈 利

紀 先生

日本学校心理学会 第16回大会

- 期日:2014年9月6日(土)・7日(日)
- 会場:玉川大学(東京都町田市玉川学園6-1-1)
- 大会テーマ:一学校心理学は子どもたちに何ができるのか—
- 記念講演:「テクノロジーが子どもたちの能力を引き出す」
東京大学先端科学技術研究センター教授 中邑 賢龍 先生



[編集後記]新年度が始まり、職場に若い人がさらに増えました。熱意はあれど、子どもたちへの関わり方や行動の背景を探る方策などはまだ持ち合わせてはおらず、今はただ目の前の子どもたちから真摯に学び続けること、と日々奮闘している姿に初心を思い出させられます。このニューズレターも新緑の頃には初心を思い出し、新しい息吹も頂きたいと思います。 ryoshi@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp (編集部)